

●シリーズ●わがまちの文化財へ37

町指定重要文化財 五鈷杵 (伝 廃万福寺跡出土)

昭和62年11月11日指定

この密教法具は、金銅製で、長さ15cm、鎌倉時代の特徴を有する優れた作品で、県史跡廃万福寺の什物(所有物)であったものと思われるが、史跡内での詳細な出土地は不明である。

廃万福寺跡出土の古瓦や石造物(層塔・宝篋印塔・五輪塔・板碑・石仏)などとともに、廃万福寺の歴史を物語る貴重な遺物である。



密教は、平安時代に最澄・空海などによって中国から請来されたと伝える。(天台宗・真言宗)。

密教の修法に用いられる法具は、心中の煩惱をくだき仏性の智光をあらわす意味で用いられている。密教法具の種類としては、金剛杵・金剛鈴・金剛盤・輪宝・羯磨・火舎・花瓶・六器ほか多くの法具がある。

●シリーズ●わがまちの文化財へ38

町指定重要文化財 太平寺仁王門

昭和45年4月1日指定

この門のある興国山太平寺は、備後国の禅宗の寺では三本の指に入ると言われたほどの広大な寺域をもつ古刹(古いお寺)であったといわれています。応安5年(一三七二)の開山当時は、真言宗として大坪(現在地より1km東方)にありましたが、密伝真大和尚の時、禅宗の一派である臨濟宗に改宗し、明応10年(一五〇一)、檀越芸州甲立城主宍戸河内守成頼によって現在地に建立されたとの記録があります。元来、禅宗では「仁王」は祀らないのが慣例ですが、この門の存在自体が真言宗時代の名残りを示しているといえます。仁王門の「由来記」によると、宝暦9年(一七五九)、第14世円翁和尚の時再建され、



天保2年(一八三一)、第18世績翁和尚の時、地元小国村の大工栗橋甚右衛門安逸等によって修造されています。門の左右の仁王像は、文化10年(二八一三)、17世無禅和尚が、小国村の工匠薮花阿部治水信によって「山門守護二尊金剛二王神を彫刻して安置した」という記録がなされています。門は瓦葺・切妻、開口5.2m・奥行2.8mの四足門で、江戸中期の建築です。